



TITLE:

[研究集会の記録] 趣旨説明

AUTHOR(S):

西, 芳実

CITATION:

西, 芳実. [研究集会の記録] 趣旨説明. CIAS discussion paper No.31 : <東南アジア学会関西例会ワークショップ報告書>洪水が映すタイ社会 --災害対応から考える社会のかたち 2013, 31: 10-12

ISSUE DATE:

2013-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/228587>

RIGHT:

© Center for Integrated Area Studies (CIAS), Kyoto University

洪水が映すタイ社会

災害対応から考える社会のかたち

日 時：2012年5月12日（土）

場 所：京都大学稲盛財団記念館 大会議室

主 催：東南アジア学会関西例会

共 催：地域研究コンソーシアム（JCAS）社会連携部会／
京都大学地域研究統合情報センター「災害対応の地域研究」プロジェクト

趣旨説明

西 芳実

京都大学地域研究統合情報センター

はじめに、「洪水が映すタイ社会——災害対応から考える社会のかたち」というタイトルに込めた意味について簡単にお話します。

■ 潜在的な課題が顕在化する災害時は社会の特徴を捉える機会でもある

災害を理解するには、社会の理解が欠かせません。災害は、社会によってあらわれ方が異なります。洪水、地震、津波といった災害のあらわれ方は、それが起こった地域の社会のありように大きく左右されます。したがって、災害を理解するには社会の成り立ちやありようを知る必要があります。

また、災害そのものを理解するだけではなく、災害への人びとの対応を理解するうえでも、社会の理解は欠かせません。そこには社会の固有のかたちがあらわれています。災害に対応するということは、単に目の前で起こっている災害にどのように対応するかだ

けではなく、人びとが日ごろから危機や困難をどのように受け止め、どのように対応するかという問題に関わっているためです。

社会に加わる災厄は災害だけではありません。紛争や大規模な事故、政変なども含まれます。こうした危機や困難に人びとがどう向き合ってきたかという理解を踏まえることで、災害への対応についてもより深い理解を得ることができます。

また、災害には、その社会が被災前から抱えていた潜在的な課題があらわなかたちで出てくるといった側面があります。みなさんもお存じのことと思いますが、たとえば東日本大震災においては、高齢化、過疎化、医療サービスの不均衡といった被災前からあった問題がより明らかなかたちで出てきたということがありました。

これらのことは、災害を理解するには社会についての理解が欠かせないということだけではなく、さらにもう一步踏み込めば、災害時は平時には見えにくい社会の特徴を捉える絶好の機会であることを意味しています。そのような意味で、本ワークショップのテーマを「洪水が映すタイ社会」としました。

■ 2011年タイ洪水を切り口に災害対応にあらわれるタイ社会の姿を探る

「災害対応から考える社会のかたち」という副題に込めた意味についても、簡単に触れておきたいと思います。私たちは、災害対応を通じて地域について考える

ことが、地域について考える地域研究の新しい方法ではないかと考えています。ひとたび災害が起こると、その社会に日ごろ馴染みがなかった人たちも、それぞれの専門分野の立場からその社会に関心を向けます。災害対応の現場とは、異なる分野の専門家が専門性を超えて関心や問題を共有する場なのです。

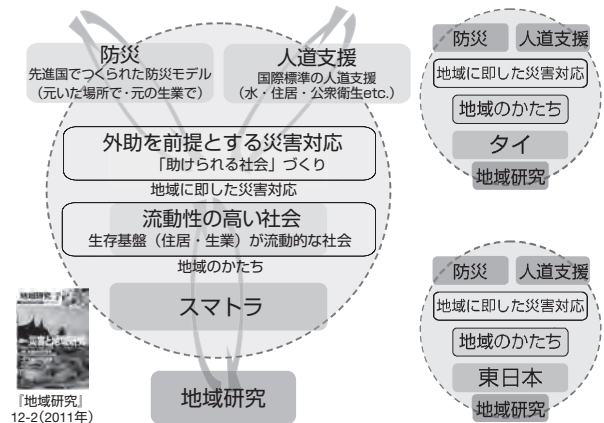
たとえば、私が専門としているインドネシアのアチェは、2004年スマトラ沖地震・津波の被災地となりました。この災害をきっかけに、人道支援、災害、外交、さらに政治や経済、復興といった多様な専門分野をもつ人たちがアチェ地域に関心を向けるようになりました。そのような場では、アチェ社会についてくわしく理解するだけでなく、それらの異なる専門分野をもつ人たちに、その地域社会についてわかりやすく、それぞれの専門分野でも役に立つかたちで語る説明をいかに出せるかが問われています。

タイの水害でも、人道支援団体や民間企業の人たち、そしてNGOや外国の人たちを含めて、多くの人たちがこの災害をきっかけにタイ社会に関心を向けたと思います。私自身もそうした者の一人です。

私は、2011年のタイ洪水に関する報道を見て、大洪水に遭っても避難せず、冠水した市街地にとどまって日常生活を送る人びとの姿がたいへん印象的でした。また、スマトラを専門とする私から見て、タイを訪問したときに印象的だったのは、いつもどこかで建物や文化財が修復されている様子でした。このように日々修復が行なわれている光景と、定期的な大規模な洪水が起こってきたこととは、いったいどのように結びつくのか。タイがあたかも修復を前提とする社会であるかのように見えたことをどう理解すればよいかという問題意識をもっています。

私自身は、今日のワークショップがそのようなことを考える機会になればよいと思いますし、今日ご参加のみなさんが、このワークショップを通じてそれぞれ災害の現場で感じた疑問について考える機会になればと考えています。

そのため、本日はタイ社会あるいは災害を直接の専門としない研究者が交わって総合討論を構成しています。このワークショップを通じて、2011年のタイ洪水を切り口に、タイの災害対応にあられるタイ社会のかたちについて考えられればと思います。また、タイ洪水の経験から、ほかの地域や社会のほかの災害を考えるうえでの教訓や学びを引き出す場となればと考えています。



資料1 災害対応の地域研究の可能性

■ 専門家どうしの協働から生まれた アチェに見合った防災、人道支援のあり方

災害対応の現場について見るのが地域について理解を深める一つの方法ではないかということを図示したのが資料1です。災害が起こったスマトラで何が起こっていたのかをモデル化したものです。

災害が起こって、さまざまな専門家がスマトラのアチェにやってきました。防災、人道支援、そして地域研究者もその場を訪れた者の一人です。それぞれの専門家は、ふだん自分がフィールドとしている場所で作られた理論などをもとに、新しい現象に向き合います。ただし、見ている現象自体は災害が起こったあとのその社会の様子、あるいは災害がどのように起こったのかということですが、話をしているとさまざまなズレが生じてきます。災害対応の現場は、そのようにズレが生じるなかで、それぞれの専門分野の人たちが、自分の専門性はというところにあるのか、あるいは自分たちの理論はどのような成り立ちで作られていたのかを認識する場になっていました。

防災の例を挙げれば、スマトラの災害を見ることを通じて、「自分たちが進めてきた防災の理論は先進国で作られた防災モデルだった。元いた場所で、元の生業によって復興をめざすあり方だった」というモデルの性格が浮き彫りになりました。人道支援の人たちも「どうしてスマトラの現場で支援がうまくいかないのか」と考える過程で、自分たちのもっていた規範は国際標準の人道支援——すなわち、水、住宅、公衆衛生などの分野に区切って支援を行なうスキームであり、これが現実のスマトラの被災地でうまく適用できなかったことに気づきます。

このようなやりとりを続けるなかで、スマトラ地域にくわしい地域研究者は、「スマトラでそういうこと

が起こるのはなぜなのか」についてどう説明するかを日々問われることになりました。こうしたプロセスのなかで、スマトラの場合は「流動性の高い社会である」——別の言い方をすると、「スマトラは住居や生業などの生存基盤が流動的な社会である」と説明することで、防災や人道支援の人たちにスマトラ社会の特徴を伝えることができるという考えに至りました。

このようなかたちでスマトラの社会の特徴が捉えられることを通じて、たとえば外助を前提とする災害対応、つまり、何か起こったときに必ず外から助けがくる、あるいは助けられるような状況にしておく社会を作ることが、この社会に見合った防災であり人道支援ではないかという知見が得られました。

■ 災害対応の現場は 新たな地域研究の実践の場

これは、外助を前提とする災害対応というスマトラの社会に即した災害対応の考え方が生まれた例でもあります。同時に、地域を理解しようとする地域研究者の側からすると、この社会を説明するときにはどのような説明の仕方をするとかほかの地域の災害の経験にも活かせるかたちになるのかを考えるプロセスを得ることができました。流動性の高い社会というまとめ方をするとか、ほかの地域やほかの事例について考えるうえで有効なのではないかというところまで至っています。

このようなことは、おそらくほかの災害対応の現場でも起こることだろうと思います。災害とは専門分野を超えてさまざまな人がいっしょに特定の事象について考える場だからです。そこで地域の専門家は、どのようにしてほかの分野や事例に関わる人たちにもわかるかたちで地域について説明する言葉を得られるのかが問われています。そういったところから、災害対応の現場とは地域研究の新しい方法を実践する場になっていると思います。

スマトラのモデルは、単純化されていてモデルにふさわしいものだと思います。災害の直前は紛争で戒厳令が敷かれて鎖国状態であり、災害後に関わってきたのが防災と人道支援の二つでした。他方で、東日本大震災の場合は人道支援は引っ込んでいて、国内のボランティアや行政の役割が大きかったと思います。また、タイの場合は、もしかしたら企業や外国人という要素もあるかもしれません。本日はそのようなお話も聞ければと思っています。

第1セッション

報告1

工学的見地から考察する 2011年洪水と政府対応

星川 圭介

京都大学地域研究統合情報センター

タイという国は現在、さまざまな階層・集団に分かれて反目しあう状況にあって、あらゆる出来事が政治的事件として見られがちです。今回の洪水も、その要因や政府の対応を巡る対立や政治的な論争を引き起こし、揚句には陰謀説まで出ました。こうした議論の主な論点になっている政府対応の問題点や洪水の要因について、工学的な視点から状況を整理することを目的としてお話しします。

また、今回タイの洪水について注目していられなかった方もおられるかもしれませんが、洪水の全体像についての解説も盛り込みます。

■ 洪水の根本原因は 台風、熱帯低気圧などによる大量の降雨

洪水の根本的な原因は、タイ全土に大量の降雨があったことです。昨年はラニーニャによって世界的に異常気象の状況にありました。日本でも冬が異常に寒いとか大雪が降るとかという影響があったように、タイでも、平年より多い五つの熱帯低気圧もしくは台風が真上や近くを通りすぎました。平均では年に三つ弱ぐらいです。

それに加えて、モンスーンによる降雨・季節風による降雨も、例年より多くもたらされました。台風がタイ周辺を通過しはじめる6月、7月以降にタイの各所で洪水が発生し、北部に洪水被害をもたらした水が最終的に集まるメコン・デルタで、雨季の終わりに大規